

## 演劇研究と舞踊

鳥越文蔵

〈演劇研究〉と題しても私の専攻する分野は日本演劇であり、しかも近世演劇に限定されるような狭い範囲しか発言できないことを最初にお断りしておく。

日本における演劇研究の歴史として、早いものには中世時代能の世阿弥の如き実演者が己の芸の向上のために、あるいは後継者への秘伝としての考察を書きとどめたものがある。これらは研究の名に値するものである。歌舞伎や人形浄瑠璃の役者や作者などにも、この精神が受け継がれてきた。主として〈芸談〉と称されるものである。

一方、演劇の作製者側からでなく、享受者側の記録として、歌舞伎には〈役者評判記〉と称されるものがあり、近代の〈劇評〉に近いものと見做してよく、単なる舞台や役者の記録にとどまらず、演じられている舞台を如何に位置付けるか、価値付けるかとの努力がみられるので、ある意味では研究の所産と認めうるものである。

次の段階には、文人や好事家など全く演劇界には部外者が残した芝居に関する記録類も挙げられよう。中には、ある特定の役者を最頁にするあまり、その役者の伝記を残したいという動機から、歌舞伎の〈年代記〉を著した人もある。これも立派な研究業績である。日本演劇と〈舞踊〉と題したからには、音楽的要素も無視できない。〈音楽書〉が著されたのは古く、天福元年(1233)ごろの「教訓抄」まで遡ることができる。幕末まで一気に飛ぶが、文政五年(1827)の「歌舞目目」という舞楽中心の音楽書がある。この書を踏まえ、近代に入って最初の演劇総説の書ともいべき小中村清矩の「歌舞音楽略史」が著される。

近代に入ると欧米の文学研究法が摂取される。演劇に限って言えば、戯曲中心の研究が盛んになる。東京帝国大学の国文科系統として、藤村作、近藤忠義、守隨憲治らがあり、高野辰之を総帥として美学系の研究者も活躍した。しかし、現在の東京大学における〈近世戯曲〉は、国文学研究室よりも国語学研究室により多く所蔵されているという情況から推察すると、近世戯曲を文学として鑑賞する以上に、近世語の資料として収集した橋本進吉の学恩が優っていると、私には思われる。

京都大学は〈上方〉という地域性のゆえか、歌舞伎より浄瑠璃の研究が盛んである。とくに藤井乙男は近松門左衛門研究の基礎を築いた。同じ時期に大阪の在野の学者木谷蓬吟も近松研究を推進

した。この木谷蓬吟は少し色あいが異なるが、以上の官学の研究者たちの方法を〈戯曲論的方法〉と名付けることにする。

これと異なる〈芸態論的方法〉の系統がある。坪内逍遙、河竹繁俊、郡司正勝と連なる早稲田大学の系統である。とくに〈舞踊〉それも〈民俗芸能〉にまで広げての舞踊研究者を加えると、小寺融吉、本多安次の名も落せない。日本演劇研究と舞踊研究の接点を求めるとするならば、この〈芸態論的研究〉が最も接近していると云ってさしつかえなからう。

この他に、西田直二郎、中村直勝から林屋辰三郎と続く〈日本文化史〉の研究者によって論じられる芸能史は〈環境論〉と名付けられている。その命名に従って、もう一系統を挙げるならば、日本民族学を樹立した柳田国男から折口信夫そして池田弥三郎と続く〈伝承論〉の立場の研究もある。

能を主とする中世芸能には、能勢朝次を筆頭に錚々たる研究者と、その系統があるようだが、私の専門を少し離れるので省略する。ただ極く最近能の研究者横道万里雄が提唱する、日本芸能を中世に限らず近世芸能まで含めて〈楽劇〉という概念で把握しようという動きが起こっている。坪内逍遙にも「新楽劇論」という〈新舞踊劇〉を論じた著書があるが〈楽劇論〉と書くところヴァーグナーを連想するので、ここでは〈楽劇派〉と称して、この方法の進展を見守ることにしよう。

今まで近世演劇研究の学統を述べたのであるがそこで名前が出なかった人たちにどのような〈舞踊〉に関する著書が表されているかを列記しておく。岩橋小弥太「日本舞踊史」(大正11)、九重左近「江戸近世舞踊史」(昭和4)、中村秋一「日本古典舞踊の研究」(昭和17)、三隅治雄「日本舞踊史の研究」(昭和43)など。辞典には渥美清太郎「邦楽舞踊辞典」(昭和13)があり、演目解説には江口博「日本舞踊全集」(昭和52~57)がある。もちろんこの外にも多くの書物があるがとても網羅できないのでやめる。

松本千代栄副会長から今回話をするようにとご下命があったのは、鳥越編の近著の書名に「歌舞伎の狂言——言語表現の追究」としたことによるらしい。しかしこの場で私は〈言語表現〉や〈身体表現〉について全く触れなかった。それは、この後行われるシムポジウムで〈身体〉が論じられ

ると思ひ、前座の口にすべきことではないときめたのである。

シムポジウムに日本舞踊の側からお招きした松岡心平氏と渡辺保氏の著書を一冊だけ挙げておくと「宴の身体」(岩波書店)と「日本の舞踊」(新岩新書)となろう。以上。

\* 1992年度秋季第34回舞踊学会  
『舞踊學』第16号より転載